



上/洗練されたフォルムが魅力の蓄熱型ストーブ「T-ONE stone」。セラミックスと人造石によって製造した外装で、色や仕上げのバリエーションも豊富。燃焼効率は85%以上で排気はクリーンだ。1日3.5kgの薪を1〜2回燃やすだけ、焚きつけには5分とかからない。熱出力6kw、W410×D425×H1395mm、215kg、¥680,000。中/ぼってりとした「トボリーノ」も大きな蓄熱容量が魅力。下/薪の収納アイテムがインテリアになる。左の薪ストック「Glass wood store」は¥136,000、W320×D370×H1400mm、右の「Wood box」は¥67,000、W400×D400×H480mm。

## スイスの薪ストーブ最前線 進化するデザインと機能性

ミネルギー住宅メッセ (スイス、ベルン開催)



薪ストーブは着実に進化している。現代の空間や生活スタイル、そして環境意識の高まりに応えるようにして――。

2003年11月末にスイスの首都ベルンで開催されたミネルギー住宅メッセを見学してそう感じた。省エネルギー型の住宅をテーマとしたこのメッセでは、質の高い住まいづくりへの意欲旺盛なメーカーや団体により、密度の濃い展示が繰り広げられていた。

中でも驚いたのは薪暖房の種類やデザインの豊富さだ。住宅の省エネルギー化に伴い、薪ストーブの需要が再び高まっているという傾向を肌で感じた。そこで群を抜いて際立っていたプロダクトがトーンヴェルク・ラウゼン社 (以下TL社) の蓄熱型薪ストーブである。その魅力はインテリアとしての洗練されたデザインに加え、蓄熱暖房による快適性、そして最高水準の燃焼効率といった機能性にある。スタイリッシュなストーブを囲んで炎を楽しんだ後にも、石の本体に溜められた熱が8時間もかけてゆっくり、じんわりとしみだして、朝まで家を暖め続けてくれる。

「こういった製品づくりの背景には、私たちメーカーとデザイナーGAAN、そして燃焼専門家のサレルノ博士との妥協を許さないコラボレーションがありました」と、TL社の経営者ベーター・ブロッググリンさんは語る。元来、耐火製品を生産してきたTL社は、人件費の高いスイスで小メーカーとして生き残ってゆくために、90年代に新しいプロダクトラインの開発に取り組んだ。目標は「住宅の中で高級品となるようなプロフェッショナルなデザインと機能を備えた蓄熱型ストーブ」づくり。そして今日TL社のストーブたちは国内外で数々のデザイン賞や環境賞を受賞し、同社の主要な収入源となるまでに成長した。昨年より日本にも輸入されはじめた。

日本の蓄熱容量の少ない構造の住宅で、冬に快適な住環境をつくるには、蓄熱型薪ストーブがとてとても適していると思う。しかし、今日の日本で販売されている薪ストーブはデザイン的にも選択肢が少ない上、ほとんどが輸入品だ。日本に豊かにある森林資源の活用のこれからを考えると、日本製の現代的な蓄熱型薪ストーブが近い将来に必要なと思う。またこんな薪ストーブが暮らしの中に欲しい、と幅広い消費者が思えるようなプロダクトの選択肢があれば、自然と消費者から木エネルギーへの関心が広がって行くのではないだろうか。日本のデザイナーやメーカーの今後に期待したい。

ミネルギーメッセの会場。省エネ住宅をテーマとした展示を熱心に見学する設計者や施主が見られた。



TL社のストーブデザインを手がけた2人組のデザイナーGAAN。インテリア、建築、プロダクトデザインの分野で活躍する。  
<http://www.twlag.ch>

